

桃源郷

ヨコテ

村の外れの神社で遊ぶのが子供たちの常だった。遊びを決めるのは年長で大将気取りの松吉と決まっている。得意な角力や独楽など、勝手に決めては自分が勝つ。それが同じ歳の弥助には面白くなかった。

「なあ、御山に入っにはいけないと云われているだろう？」

周りの子供たちを見渡して弥助は云った。

村の子供たちは、弥助が何を云い出すのだろうと興味深げな顔を見せた。

「云われているけど……」

「どうしてだか知っているか？」

「知らない」

不敵な笑みを浮かべ、弥助はおもむろに口を開いた。

「山姥が住んでいるからだ」

「やまんば？」

年少の子が怪訝そうに、何のこと？ と、隣の子に顔を向ける。

隣の子も知らないようで、じっと弥助の次の言葉を待っている。

「人を食う物の怪だ」

おどろおどろしく弥助が云うと、子供たちの顔がサッと青くなった。

「人を食う……」

子供のひとりが怖々と御山に目を向ける。他の子もつられて目を向けた。

御山は村の南にあり、いかにも魔物が棲んでいそうな鬱蒼とした山だった。

弥助は秘密の話でみんなの気を引くことが出来たと思い、ひとり悦に入った。

しかし、弥助をせせら笑う者がいた。

「山姥などいるはずがない」と、弥助の話を否定して松吉が云う。

「いないとどうして云えるんだ？」

「いないものはいないんだ」

根拠のない、頭ごなしの松吉の物言いに勘吉はむきになった。

「お侍さんから聞いたぞ。御山には山姥が棲んでいるんだ。山姥は山に迷い込んだ人や、ときには里に現れて人を食うらしい」

「そんな話は嘘っぱちだ。山は危ないから近づかないように脅かしているだけだろう」

「嘘じゃない。現に、俺の弟がいなくなった、産まれたばかりの弟がな。五年前のことだ。お前たちは知らないだろうが、弟は山姥に攫われたんだ」

実際の話が出て松吉は動揺を見せたが、それをすぐに押し隠した。

「いるかいないか、確かめに行こうじゃないか」

「馬鹿を云うな。行ったら食われてしまうぞ」

「怖いのか？」と、松吉が半笑いに揶揄して云う。

「怖いもんか」

云ってはみたものの、弥助は正直怖かった。

「なら一緒に行ってみようじゃないか」

「ああ、望むところだ」

松吉が挑発しているのは分かっていたが、自ら切り出した話だけに後には引けず、弥助はつい口走ってしまった。

「お前たちはどうする？」

松吉が子供たちを見渡して云う。誰もが尻込みするばかりだった。

「ちっ、意気地がないな」

嘲笑を浮かべ、意気揚々と神社の石段を下りていく。下りきったところで石段を見上げ、並んでいる怖々とした顔を眺める。そしてその目を弥助に据えた。

「どうした、弥助。一緒に行くんじゃないのか？ 怖じ気づいたのか？」

弥助は周りの顔色を窺った。

松吉のことなんて無視しろ、という顔もあれば、お前が言い出したことだろう、という顔もあった。弥助は迷った。山姥は恐ろしいが、臆病者とも思われたくない。

「どうやら怖いようだな。俺には怖いものなど何もない。臆病者はここで待っている。俺が確かめてきてやる」と、松吉が尚も弥助を煽る。

「俺だって……山姥なんぞ怖くも何ともない。いま行く」

弥助は引くに引けなくなった。後悔するがすでに遅い。

「それなら早く下りて来いよ。他には……他には誰もいないのか？」

ゆっくり石段を下りる弥助に続く者はいなかった。

「どいつもこいつも意気地なしだな」

松吉の目が下りてきた弥助を捉えた。

「意気地なしどもは放っておいて、ふたりで行くか」

弥助はふたりだけでは心細かった。山姥が現れたらどうなるか——

「本当に誰も来ないのか？」と、石段の上に呼び掛けた。

自分の怖じ気を抑えるには少しでも多くいた方がいい。しかし、弥助の願いも虚しく、石段の上の子供たちは顔を見合わせるだけだった。

「仕方ない、ふたりだけで行くか」

松吉の呼び掛けに、弥助は腹をくくった。

鳥居をくぐり、御山の麓へと続く小道をふたりは黙って歩いた。黙っていると、山姥の想像の姿が思い浮かべられ、恐怖心がますます強くなっていく。白髪の醜い老婆、獣のような口、無慈悲な目——松吉が何か馬鹿な話でもしてくれないかな、と弥助は思った。気を紛らわせられるならば何でもいいと、先を歩く松吉の背中を縫う目で見ると、松吉は何も恐れていないかのようにその肩を怒らせている。こいつには本当に怖いものなどないのだろうか——。

小道の脇に広がっていた田畑が荒地に変わった。もう御山の麓だ。荒地には背の高い草が生い茂っており、先を歩く松吉を呑み込んでいる。離れないように急がないと見失いそうだった。

しばらく歩き、荒地が途切れると、再び道らしきものが見えてきた。道には違いなかったが、草の生えていない箇所が筋になっているだけで、獣道とたいして違わない。この山道の奥に山姥がいる——。黙って歩いていると恐ろしさが募り、弥助は堪らなくなった。すると松吉が突然立ち止まり、振り返った。

「なあ……」と、弥助に呼び掛ける。

松吉の顔は青かった。

「急に立ち止まったりして、驚かせるんじゃないよ」と、弥助は口を尖らせた。

「そんなに驚くことはないだろう。なあ、弥助。何もいるわけがないんだから……もう帰らないか？」と、松吉が提案する。

「だから、それを確かめるんだろ」

「無駄だ。何もいないのに山に登るなんて疲れるだけじゃないか」

「ここまで来て帰るのか？」

弥助は松吉の真意を探った。松吉も怖いのではないか――。

「俺は帰る。行くんならひとりで行けばいい。行って弥助が確かめてくればいいじゃないか」

松吉がきっぱりと云う。

「俺ひとりで……」と、弥助は声を漏らした。

松吉がいたからこそここまで来たのに、松吉に登らないのであれば自分も帰りたい。

「山姥が怖くないんなら、ひとりでも大丈夫だろ？」

弥助がひとりで登ると決まったかのように、松吉が来た道を引き返し始める。

「おい、本当に帰るのか」と非難の口調で云い、弥助は松吉の背中を目で追った。

「置いていくなよ」

弥助は泣きそうになった。松吉の後を追って自分も引き返したい。しかし、あれだけ云った手前、このまま帰ったら格好がつかない。かといって御山に登るのは怖い。山姥がいなかったとしても獣はいる。獰猛な猪や猿がいることだろう。熊もいるかもしれない。

荒れた森に目をやる。近くには何もいないようだ。取り敢えず少しだけ登ってみる。登ってはみたものの、弥助はその足をすぐに止めた。緩やかな上り坂は折れていて、先が見通せない。何かいないかと耳を澄ませる。御山は静まりかえり、時折、雉のケッケーンと鳴く声が聞こえる。聞こえるたびに弥助はどきりとした。雉が何かの気配を感じて鳴いているのではないか。聳え立っている樹々の向こうの暗がりに、何かが潜んでいる気がする。こちらの様子を窺っている気がする。

駄目だ、行けない——。

弥助はしばらくここにしようと考えた。このまま時間を過ごして村に帰り、御山に登ったことにする——山姥はよそへ行っていたようだと、そう云えばいい。どうせ確かめる者などいない。

我ながら上手い思いつきだと弥助は胸中で自賛した。

皆はどうしているだろうと気になり、振り返って神社の方を見やる。村の手前外れ、小さく見える神社には目印となる一本の神木がそびえており、その付近を凝視したが人の姿はなかった。山姥の話に興味を失せたのか、それとも恐れをなしたのか、皆は弥助が戻ってくるのを待たずに家に帰ってしまったようだ。

「ちえっ、薄情な奴らだ」

独りごちて視線を山の麓に落とすと、そこには黒い塊があった。皆の頭だった。弥助は安堵の溜め息を吐いた。考え直して一緒に登ってくれるのかと思った。

「早く来いよ」

笑みを浮かべ、手を振りかざして弥助は云った。しかし、皆はその場から動こうとしなかった。一步前に踏み出した松吉が、残酷な言葉を投げかける。

「お前こそ早く行って来いよ。ここで待っているから」

皆が下で待っている——弥助は目の眩む思いがした。誰もついて来てくれないばかりか、登ったと嘘を吐くことも出来ない。萎えかける気持ちを抑え、弥助は精一杯の虚勢を張った。

「山姥がどんなに恐ろしいか、確かめてきてやるからな！　いいか、俺が帰ってくるまで、絶対にそこを動くなよ！」

ひとりひとりを睨みつけ、弥助は踵を返して山道を上り始めた。

気が立っていたせいも、足取りは軽かった。まだ山道の勾配は緩やかで、そよぐ春の風も心地いい。怒りに恐怖が薄れ、さっきまで恐れていた暗がりも森が暗いのは当たり前だと思えるようになった。雉の鳴く声にしても、鳴きたいから鳴いているだけだと妙な確信を持った。恐怖心を心の奥底に押し隠し、弥助は山道を登った。

次第に道は狭くなり、人がやっとひとり通れるだけの幅になった。片側には谷があり、うっかりすると落ちそうだ。石ころだらけの道にはところどころで木の根が張っていて、その上を歩くと裸足の足裏がくすぐったく感じられた。

弥助は後ろを振り返ってみた。麓が見えるかと思ったが、ずいぶん登ったようで、弥助はすっかり森の中にいた。おそらく皆は麓にはいないだろう。山に登った者のことなど忘れて神社で遊んでいるに違いない。それならそれで結構だ。御山の上の様子がどんなだったかを詳らかに教えてやれば皆の尊敬を集められるはずだ、と弥助は思った。

落ちていた木の枝を拾う。まだ疲れてはいなかったが、杖代わりにして、弥助は上へ上へと歩いた。こんな木の枝でも猪くらいは追い払えるだろう。

しばらく歩くと、道の傍らに小さな祠があった。何かを祀ってあるのだろうが、弥助は聞き覚えがなかった。横に立て札があり、謂われが書いてあるのだろうと思った弥助は近づいた。読んでみて、たちまちや助の気は重くなった。

“これよりの入山を禁ず”

何のために禁じているんだ——。

嫌な思いが弥助の脳裏をよぎる。

山姥だ。山姥がいるから登ってはいけないんだ。

忘れかけていた恐怖が蘇った弥助は、何のために建てられたのかが知りたくて祠に目を移した。小さな祠はそれほど古くはなさそうだった。せいぜい五、六年が経ったくらいだろうか。張られた注連縄はちぎれそうになっており、一度も替えられていないようだ。周りの草は生え放題で、手入れの痕が窺えない。建てられたきり放ったらかしにされているのだろう。ぐるりと廻ってみたが、何を祀ったものか、手掛かりは何もなかった。しかし、弥助は確信していた。これは山姥の祟りを恐れて建てられたに違いない――。

やはり山姥は本当にいたんだ！

弥助は背筋が寒くなり、ぶるっと軀を震わせた。これ以上ここにいたくなかった。いまにも山姥が姿を現すかもしれないと思えてならなかった。

弥助は一步後退った。

早く麓に帰りたいかった。しかし――麓には皆がいるかもしれない。神社で遊んでいてくれればいいが、もしいたら笑い者だ。まだ早すぎる。途中で引き返したのは明白で、口ほどにもなく怖くなったのだろう、と罵られるに決まっている。そんなことには絶対なりたくなかった。自分だけが臆病者だと思われたくなかった。

もうしばらくだけ我慢して引き返そう、と弥助は思った。実際にこの目で見た祠の話をすれば、上の様子は適当に云っても信じてくれるだろう。歩くのが困難なほど木が生い茂っていたとか、猿に襲われそうになったとか、ありがちな嘘で誤魔化せるはずだ。山姥を見たことにしてもいい。ぼろをまもって、口が耳まで裂けていた、歯は牙のようだった、手には人の首を提げていたとでも云えば、奴らは腰を抜かさんばかりに驚くだろう。

皆の恐怖に引きつった顔を想像し、弥助はひとりだけの森の中で笑いを嘔み殺した。

首を提げていたというのはちょっと作りすぎか――。

山姥を想像しているうちに、弥助は伝説に聞いている山姥が、実際はどんな姿をしているのだろうと興味が湧いてきた。想像するだけで恐ろしい。恐ろしいが、灯ってしまった火を消すことが出来ない。遠くからそっと見れば――気づかれないようにして近づくことが出来ればその本当の姿を拝めるだろう。子供たちはおろか、村の大人たちでさえ山姥の姿を見たことのある者はいないはずだ。俺がその最初になれる――。

弥助の頭には禁忌を犯そうとしているという意識はなかった。皆の注目を集められる喜びのみがあった。

祠に手を合わせ、これからの無事を祈る。チラチラと顔を覗かせる山姥への恐怖を押し隠し、弥助は歩を進めた。荒れた山道を踏みしめる。頭上の空はほとんど見えなくなり、夕暮れ時のように薄暗くなってきた。狭かった道幅が一段と狭くなり、それに連れて勾配が険しさを増す。手に持った木の枝の杖を時々持ち替え、石ころだらけの道を突く。雉の鳴き声がやけに近く感じられるようになった。鳴き声のした方を見やると、森の奥の暗がりには底なし沼のような静けさを湛えていた。

弥助は足を速めた。

怖くない、怖くないと呪文のように胸中で唱える。と、キキッと声がした。猿だ。近くにいる。すぐその闇の中に潜んでいる。小石を拾い上げ、弥助は闇に向かって投げた。狙いが外れたのを嘲笑うかのように、猿がキキッとまた鳴いた。するとその鳴き声に呼応して別のところからも声が上がった。森の至るところから声が上がる。

大丈夫、襲ってきたりしない。向こうだって俺が怖いはずだ。

弥助は小石を拾い上げ、もう一度投げつけた。用心のため、小石を何個か懐に抱える。

後ろを気にしつつ歩いていると、木の根に足を取られ、弥助の躰は前へ投げ出された。危うく谷へ落ちるところだった。ついた手のひらが痛い。膝も打っており、少しだけ血が滲んでいる。猿がまた小馬鹿にした鳴き声を上げた。弥助は惨めな気分だった。いるはずもない山姥を求め、酷く無駄なことをやっている気がしてくる――。

それでも自分を鼓舞し、再び歩き始める。しばらくすると道には岩が目立つようになり、鬱蒼と繁っていた木々が消えた。突然、視界が開ける。空には厚い雲が湧いていた。夕方には雨が降り始めるかもしれない。御山のどの辺りまで登ったのかは分からなかったが、そろそろ引き返してもいい頃合いかな、と弥助は思った。降り出す前には山を下りたいし、山姥は見られそうになかった。

ふと先を見やると、岩だらけの向こうは開けているようだった。好奇心に抗えず、近づいてみる。そこは乾いた土と岩だけの殺伐としたところだった。こんな場所が御山にあったのか、と弥助は驚いた。下から見上げる御山は緑に覆われた山で、どこもかしこも木が生えていると思っていた。ここだけ陥没したように、周りを崖が囲っている。細々と続いた山道はここで終わっており、山自体はまだ先があったが、これ以上進むとなると崖を這い登らなければならない。ここまで登ってきて山姥を拝めなかったことを、弥助は残念に思った。と同時に安堵の気持ちも湧いた。祠といい、この場所といい、自分が上まで登ってきたことの証明になる。弥助は、皆が尊敬の眼差しで自分を見る画を頭に描いた。

崖の上から山はさらに続いている。樹々が生い茂っていて、奥は暗い。弥助は妙な胸騒ぎを覚えた。何かが奥の暗がりからこっちの様子を窺っている気がする。目を皿にして崖の上を見やる。樹々の梢が風に揺れている。幹は強い風に晒されてきたせい少し曲がっており、その枝振りとも相まって大男が歩いているように見える。その陰に何かが隠れている気がしてならない。

怖いと思うから妙な気になるんだ。

弥助は自分を鼻で笑い、帰ろうとした。見た道に足を向ける。すると、目の端に小さな洞穴が映った。大人が二、三人も入れれば一杯になりそうな広さだった。自然に出来たにしては丸すぎて、引き寄せられるように弥助が近づくと、地面に白いものがあった。弥助は思わず後退った。人の骨だった。半分埋まった骸骨がそこにあった。

これは山姥の仕業なのか――。

近くに目を移すと、他にも何体かあり、数えてみると全部で七つあった。

弥助は足が竦んだ。骸骨を捉えた目が離せない。骸骨は男か女か分からなかった。僅かにこびりついている髪や衣服で推測できるが、どれも子供ではないようだ。

山姥だ。山姥が食ったんだ――。

「何しに来た！」

突然、老婆の声がした。後ろからだ。山姥か？ 山姥に違いない。声の遠さからしておそらく崖の上だろう。見てはならない。見たら食われる――。そう思いつつも、弥助は振り返るのをやめられなかった。そろりそろりと首を捻る。顔が少しずつ崖の方を向く。恐ろしさのあまり、弥助の目は見開かれたままだった。そしてその目は一点から動かなくなった。そこには不気味な老婆が立っていた。ぼろをまとった白髪の老婆は樹の大男を従え、怒りで顔を紅くしていた。

山姥だ！

弥助は弾かれたように駆けた。

転げながらも足を前へと運んだ。

木の杖を落としてしまったが、気がつかなかった。

錯乱した弥助の叫び声が山に響く。その叫び声に雉や猿が呼応したが、弥助には聞こえなかった。尖った石を踏んでも痛くなかった。転んだ拍子に膝を打っても何ともなかった。血が流れていることにも気づかなかった。後ろから山姥が追いかけてきている気がする。ひたひたとすぐ後ろにまで迫っている気がする。振り返っては駄目だ。振り返ったら耳まで裂けた口でひと呑みにされてしまう――。

夢中で駆ける。

ただひたすら駆ける。

やがて下り坂の勾配が少しずつ緩やかになり、気がつくとも周りは緑の樹々に覆われていた。後ろに何の気配も感じられず、弥助は足を遅くした。歩きながら乱れた息を整え、恐る恐る後ろを振り返る。と、そこには何もいなかった――。

ひと息つき、弥助は再び走り始めた。もう必死さはなかった。もう大丈夫なようだ。道の前をまっすぐに見据え、ただ走る。麓へと続く道を何も考えないで走る。

祠が見えてきた。

こんなところまで戻ってきたんだ、と初めて安堵の気持ちが湧く。走るのをやめ、弥助は祠に手を合わせて感謝した。恐怖から解放され、涙があとからあとから零れ落ちる。おいおいと声を立てて泣く。山に弥助の泣き声が響く。山は静かに佇んでおり、弥助の泣き声だけが静寂を破っている。ひとしきり泣き、嗚咽が収まると弥助はもう一度祠に手を合わせた。道に視線を戻し、麓へと歩く。弥助は夢を見ていた気分だった。悪い夢からやっと目を覚ましたように、頭がぼんやりとしていた。杖を手にしていないことに気づき、替わりの木の枝を拾う。傷めた足は、杖がなければ上手く歩けなかった。みっともないとは思ったが、仕方がない。そして弥助は涙の痕を拭いた。

麓には誰もいなかった。鳥居へと目を移す。そうかもしれないとは思っていたが、死ぬ思いで山姥の存在を確かめてきたというのに放ったらかちにされ、弥助は憤慨した。御山の頂の向こうから灰色の雲が迫ってきている。もうすぐ降り始めるだろう。皆は雨に濡れるのを嫌って非難したのかもしれない。出来ればそうであって欲しい。神社で帰りを待っていて欲しい、弥助は向かった。そこへ行けば皆が話を聴いてくれる。祠の話、骸骨の話、崖の上に立っていた山姥の話——どれもが皆の興味を惹くはずだ。それらは確実に、皆に恐怖を植え付けるだろう。そして奇跡の生還を果たした俺を皆が賞賛してくれるに違いない——。

弥助は傷だらけの足、疲労の極にあった足を引きずり、杖をつく手に力を込めた。

鳥居まで来た。まだ遠くにあったはずの雨雲はあっという間に近づいていて、雨脚の音さえ聞こえそうだった。石段に足をかける。腰を屈め、手をついて這うように登る。ぽつりぽつりと落ち始めた雨粒が次第に激しさを増し、容赦なく弥助の背中を叩く。

石段を登り切った。

拝殿の回廊に懐かしい顔が見える。胡座を搔いていて、皆が不安の面持ちで戻ってきた弥助を見ている。張り詰めていた気が緩み、弥助は泣きそうになった。

「遅かったじゃないか。待ちくたびれたぞ」と、近づく弥助に松吉が冷ややかな声で云う。

回廊に上がり、雨脚から逃れられた弥助は杖を放り投げ、両手で顔を拭いた。

「寒い。雨で躰が冷えた」

そう云いながら、弥助は皆の前にどっかと腰を下ろした。皆の期待に満ちた視線が心地いい。

「膝を怪我してるじゃないか」

「ああ」と膝をそっと撫で、鷹揚に弥助は云った。

松吉が弥助の膝を凝視している。どうしてそうなったかを考えている。しかし、弥助に訊こうとはしなかった。

痺れを切らしたひとりの子供が訊いた。

「山姥はいたの？」

弥助はぐるりと周りを見渡し、勿体をつけて口を開いた。

「ああ、いた」

至福の時だった。躰が浮き上がるようだ。この一言を云うために死にそうな目に遭ったんだ、と弥助は思った。

弥助の返答に、悲鳴を上げる者、青くなる者、じっと弥助を見返す者、反応は様々だったが、おしなべて恐怖の色に染まっているのは違いなかった。松吉も呆然としている。

「食われそうになったから、慌てて逃げてきた。お陰で転んぢまった」

わざと自嘲の笑みを浮かべ、弥助は膝頭を突き出した。

「よく逃げられたなあ」と、皆が感嘆の声を上げる。

「必死だったからな。耳まで裂けた口を広げて追いかけてきたんだ、もう少しで食われるところだった」

自然と顔が綻び、弥助は得意の絶頂にあった。話を誇張しているという意識はあったが、それくらいの嘘は許されると思った。

「躰はどうだったの？ 大きかったの？」と、別の子供が怖ず怖ずと訊く。

「大きいなんてもんじゃない。背の高さも太さも大人ふたり、いや三人分はあったな。そんな大きな化け物が髪を振り乱して追いかけてきたんだ、自分でもよく捕まらなかったもんだと思うよ」

弥助は両手を掲げ、口を大きく開いてそのときの様子を再現した。ひとりひとりに恐ろしげな顔をしてみせる。年少の子が堪えきれずに泣き出した。つられて泣く子も出てきた。それでも弥助は脅かすのをやめなかった。可愛そうかなとは思ったが、自分を抑えることが出来なかった。

「本当にそんなに大きかったのか？」

満を持したかのように、松吉が不審の顔で訊く。

「大きかったって云ってるだろ。何でそんなことを訊く？」

脅かすのをやめ、弥助は真顔になった。心の底でうずくものがあった。

「山道は狭かったよな？」

「ああ、それがどうかしたのか？」

「そんな山道を、大人三人分の山姥が追いかけてきたのか？」

「ああ、追いかけてきた」

「それは無理だろう。とてもそんな幅はないはずだ。谷に落ちかねない。それとも宙を飛んできたのか？」

「いや……宙は飛んでないが……」

弥助は言葉が続かなかった。松吉に向けていた目を逸らす。

「山姥の話が嘘だと云いたいんじゃないんだ。しかし、いくら何でも大人三人分というのは大袈裟だろう」

松吉の言葉に、皆の弥助を見る目が変わった。疑心に満ちている。

「正直、ちょっと云いすぎた。本当は普通の大人くらいの……もう少し小さかったかな」

「本当に見たの？」と、ひとりの子供が問い詰める。

「見たのは本当だ、嘘じゃない。ただ、よく見えなかったけど……」

「本当に山姥はいたの？ いたことにして俺たちを脅かしているだけじゃないの？」

また別の子供が疑いの目で訊く。

「違う、違う。本当だ、本当にいたんだ。崖の上から俺を見ていた」

松吉がじろりと弥助を睨んだ。

「見ていた？ 追いかけてきたんじゃないのか？」

「いや……崖の上において……それから崖を下りて……追いかけて……追いかけてきたかどうか、逃げるのに夢中で分からなかった。多分、追いかけてきたと思う」

話しているうちに弥助は泣きたくなった。皆の視線が痛い。

「怪しいもんだ。猿が山姥に見えたんだろう」

「そうだ、猿だ。猿に決まっている」

「猿に追いかけられただけなんだ」

子供たちが次々に非難の声を上げる。

弥助は焦った。せっかく山姥を見たというのに、このままではただ猿を怖がって見間違えたことにされてしまう。

「違う、違う。猿なんかじゃない。猿が人を食うか？ 骸骨があった。山姥に食われた人の骨だ。いくつもあった。ちょっと大袈裟に云ったけど、山姥がいたのは本当だ。山姥なんていないっというのなら、誰が人を食うんだ？」

弥助が発した“骸骨”の言葉に、皆の顔が凍り付く。弥助はさらに語気を強めた。

「それに、何しにきた、って俺に云った。猿がひとの言葉を話すか？」

弥助はここぞとばかり、崖の下の様子を話した。骸骨の位置や数、人の手で穿たれたような洞穴など、見たことの全てを説明した。また嘘の話を始めたのではないかと不審そうだった子供たちが、次第に弥助の話に引き込まれていく。

「きっとあそこが山姥の巣だな」

弥助は誇らしかった。自分だけが知っている秘密の場所を教えることで信頼を回復できたようだ。詳細な話を誰も疑っておらず、弥助は愉悦に浸った。

「骸骨は七つあったと云ったよな？」と、松吉が訊いた。

「ああ、七つあった」

「どれも普通の大人の大きさだと云ったよな？」

松吉の持って回った云い方に、弥助の心が騒ぐ。

「大人だった。子供はいない。男か女かは分からないけど……」

「それじゃ、赤ん坊の骨もなかったんだな？」

「赤ん坊？」

「弥助の産まれたばかりの弟も山姥に攫われたんだらう？ そう云ってたよな。だったら赤ん坊の骨があるはずじゃないか」

「そんなの知らないよ。他の場所に棄てたんだらう。疑っているのか？ そんな風に云うんなら松吉も登ってきたらいいじゃないか。自分の目で見て来いよ。その目で見て、俺の云ったことが嘘かどうか確かめて来いよ」

語気を荒げて弥助は云った。怖がって登らなかった奴にとやかく云われたくない。

弥助の勢いに押されて黙り込んだ松吉が、顔を紅潮させる。

「嘘だ！ 弥助の云っていることは全部嘘だ！ 嘘っぱちだ！」

「だから自分で確かめてくればいいじゃないか。ふん、どうせ行けないんだろう。松吉は怖がりだからな」

「何だと！ もう一度云ってみろ！」

「ああ、何度でも云ってやる。松吉は腰抜けだ、口先だけの弱虫だ」

松吉が弥助の胸倉を掴む。弥助も掴み返す。ふたりはいまにも手を出しそうになった。やめろよ、と他の子供たちが止めに入る。ふたりを引き剥がしにかかり、やがてふたりは離れた。それぞれを数人がかりで取り囲む。

「離せよ」

掴まれていた腕を振り払い、松吉が弥助をひと睨みして回廊から飛び降りた。雨は上がっていて、水溜まりに沈む寸前の紅い陽が映っている。それを壊してしぶきを残し、松吉は走り去った。

回廊に残った子供たちは呆然と松吉の後ろ姿を見送った。ひとりが、帰ると言い出すと、俺も俺もと続いた。神社の石段に皆が向かう中、ひとり残された弥助の頬を悔し涙が伝う。

家に帰ると、半年前に産まれた赤ん坊を背負い、母のお里が厨で夕餉の支度をしていた。戸を開けた弥助を一瞥する。

「遊んでばかりいないで、少しは子守でもしたらどうだい」と、苛立たしげに云う。

何の返答もせず、弥助は板敷きに上がり込んだ。母の方を向いて座り、背中の赤ん坊に目をやる。赤ん坊は静かに眠っていた。

山姥はあの赤ん坊も攫いに来るだろうか――。

御山で見た山姥の姿が脳裏に蘇る。大きいとの思い込みがあり、怖がっていたから実際よりも大きく見えたような気がする。冷静に考えると、自分と変わらないくらいの大きさ、もっと小柄だったかもしれないと思えてきた。口は裂けていたがろうか——。よく見ていなかった。山姥の声——恐ろしく感じたが、ただの怒鳴り声だったような気もする。

「山姥って、大きくて恐ろしいんだよね？」と、母の背中に訊く。

「何だい、いきなり」

「山姥だよ、御山に棲む化け物の」

「そんなこと聞いてどうするんだい？」

「いいから教えてくれよ」

「変な子だね。山姥は大きくて恐ろしいに決まっているだろ。姿を見られたら最期、食われちゃうんだからね、御山には近づくんじゃないよ」

実際この目で見たと云いたかった。云ったらこっぴどく叱られるだろう。それにしても、山姥はどうして襲ってこなかったのだろう——。

「人を食わない山姥もいるの？」

「知らないよ、そんなこと。いい加減にしておくれ、忙しいんだから」

「でも山姥は……」

「山姥の話をするんじゃないよ！」

母親の聲に驚き、背中の赤ん坊が泣き出した。慌てて手を止め、母が赤ん坊をあやし始める。そんなに怒ることはないだろうと思いながら、弥助は板敷きにごろりと横になり、腕枕をした。梁の煤をぼんやり見やる。

あれが山姥だったのは間違いないだろうが、少し様子が違っていた。何かを食ったあとだったから山姥は襲ってこなかったのだろうか。何であれ、御山が入山禁止になっているのはあの化け物と関係しているはずだ。あんな恐ろしいものがあるのだから、大人たちが近づくなというのも肯ける。登ってすぐに祠があった。あの祠も関係しているはずだ。やはり山姥の祟りを恐れて建てられたのだろう。そういえば赤ん坊の弟が攫われて以来、山姥が出たという話は聞かない。弥助は躰の向きを変え、母の方を向いた。背中の子はまた眠っていた。

「御山の祠は何を祀ったものなの？」

「祠？」

母が尖った声を返す。

「祠に行ったのかい？」

振り返った母の目が鋭かった。咄嗟に、弥助は怒られると思った。

「話しに聞いただけだよ。神社で遊んでいるときに……」

「本当に行かなかったんだらうね？ いいかい、御山には登っちゃいけないからね」

祠のことを訊いたのに、母がそれに触れないようにしていると弥助には感じられた。

「祠が建てられたのはどうしてなの？ 山姥の祟りを恐れてなの？」と、弥助はもう一度訊いた

。

「何でもないよ。子供が知らなくてもいいことだ」

微かに母に狼狽が見られた。そして、その狼狽を誤魔化すように弥助の膝に目を留め、訊いた

。

「その膝、どうしたんだい？」

「これ？ 転んだだけだよ」

弥助は慌てて手で隠した。

「転んだ？ 何処で？」

「神社で……」

変に隠すと怪しまれると思い、弥助は膝に当てた手を退けた。

「酷いねえ」と云い、お里が治療する。

「祠の話は誰に聞いたんだい？」

不意打ちを食らわせるように訊かれ、弥助は動揺した。

「松吉だよ」と、咄嗟に答える。

「本当だね？ 嘘を吐くんじゃないよ」

「嘘じゃないよ」

「いいかい、御山には近づいちゃ行けないからね」

弥助は本当のことを云うべきか躊躇した。松吉に訊かれたらおしまいだ。他の子供たちにも山に登ったことは云ってある。いずれ自分の吐いた嘘はばれるかもしれない。しかし、弥助はそうしなかった。ばれずに済めばそれに越したことはない。母がわざわざそんなことを確かめないだろうとの計算が働いた。

戸口ががらりと開き、父の与平が帰ってきた。幼い妹と弟も一緒だった。与平がくたびれた顔で鍬を戸口の脇に置き、水瓶から水を飲む。やおら与平が板敷きに腰を下ろすと夕餉が始まった。母が先ほどの話をするのではないかと弥助は危惧したが、お里は黙ったままだった。

飯を食い終わり、妹と弟に並んで弥助も床に就いた。

ふたりの幼い寝息を聞きながら、弥助はなかなか寝付けなかった。父と母が何かを話している。山姥という言葉が聞こえ、弥助はぎくりとした。

やはり先ほどの話を母はしているようだ。耳をそばだてる。しかし、父母の潜めた声を聞くことは出来なかった。弥助はいつの間にか眠りに落ちていた。

からりと晴れ渡った空の下、弥助は鍬を振り、父の手伝いをしていた。午後からは遊びを許されており、神社へ今日も行くかどうか思案する。誰も自分の話を信じてくれず、悔しい思いをした。意地でももう仲間にやってやるもんかと思う。しかしその反面、このまま孤立するのではないかとの不安に駆られる。晴れ晴れとしない弥助に近づく子供があった。松吉だった。狭い畝を俯き加減で歩いてくる。弥助が見ていることに気づくと一旦立ち止まり、そしてまた近づいてくる。弥助は松吉が来るのを待った。昨日の話はしたくなかったが、来た理由はおそらくそのことだろう。

父の背中が畑の端にあった。黙々と鍬を振っており、話を聞かれることはなさそうだった。

果たして松吉は意外な形であの話話を始めた。

「昨日はごめんよ。俺が悪かった」

人に謝ることなどない松吉が頭を下げている。弥助は怪訝の面持ちで話の続きを待った。

「弥助の話は本当だった。親父も祠や崖に囲まれた広地があるのは知っていた。しかし、骸骨があるのは知らなかったようで、驚いていたよ。山姥が本当に出たって呟いて……御山には絶対に登っちゃいけないって念を押された」

松吉が素直に謝ってくれて弥助は嬉しかった。嘔吐き呼ばわりしたことは許してやろう。が、山姥が本当に出た——というのが引かかった。

「本当に……ってことは、前にはいなかったのかな？」

「ただの伝説と思ってたんだろ。それが本当のことだったから驚いたんだ」

弥助は釈然としなかった。ただの伝説にしては、弥助が山姥を見る前から子供たちが御山に登るのを大人は異常に恐れ、禁じていた。

「何にしても、お前が嘘を吐いてないことだけは分かった。昼から遊ぼうぜ。待ってるからな」
云い置いて、松吉は畝を引き返していった。

「松吉と遊びの相談か？」

いつの間にか父が背後におり、弥助は驚いた。話を聞かれたかと思ったが、そんな様子は窺えなかった。

「そうだよ」

「たまには子守でも手伝ったらどうだ。まあ、お前には無理か」と笑顔で云い、言葉が続けた。

「遊ぶのは構わんが、御山には近づくんじゃかにぞ、いいな」

父はもう笑っていなかった。

昼が過ぎ、子供たちが神社に集まる。皆が駆け寄ってきて詫びを云い、凄いものを見たなと弥助を誉め讃えた。どの子供も家に帰って親に確かめると、松吉の親と同じように驚いたらしい。皆に山姥の話をしてもらえた弥助は上機嫌になった。率先して遊びを仕切る。命令口調に腹を立てるものはおらず、反対を唱えることの多かった松吉でさえも弥助の提案に従った。弥助は御山を下りたときに望んだとおり、皆から尊敬の眼差しで見られ、得意の絶頂だった。

やがて日が暮れ始め、ひとりふたりと家路に就いた。弥助も家に向かった。遊びの疲労が心地よかった弥助の脳裏に、嫌な考えが浮かんだ。皆がそれぞれの親に山姥の話をしたのであれば、それが自分の親に伝わっているかもしれない。話し好きが多いから、おそらく伝わっていることだろう。弥助は愁いに沈んだ。

嘘を吐いた自分を親はどんな顔で迎えるだろうか。まだ伝わっていないとしたら、先に云うべきだろうか。御山に登ったことを包み隠さず話せば、少しは怒りが和らぐだろうか。普段は温厚な父も嘘だけは許してくれない――。

家路への足取りが重くなる。

ひとつ大きな溜め息を吐き、戸口を開ける。

父の与平はすでに帰っており、板敷きにでんと座っていた。顔が怒っている。話は伝わってしまったようだ。いつもは騒がしい妹たちも大人しくしている。母に目をやると、母は弥助を一瞥したあと、父に目を向けた。

「弥助、ここへ座れ」

与平の野太い声に観念し、弥助は父の傍らに座った。すぐに手が飛んでくると覚悟したが、父の手は胸の前で組まれたままだった。

「御山に登ったそうだな」

「はい……」

「どの辺りまで登ったんだ？」

「崖に囲まれた広地までです」

「本当に山姥を見たのか？」

「はい、見ました」

「どんな姿をしていた？」

「よく見ませんでした、恐ろしい化け物でした」

「化け物か……その化け物が、何しに来たと云ったそうだな？」

「はい……」

「お前を見知っている様子はなかったか？」

「えっ？」

山姥が俺を見知っているとはどういうことだろう。弥助は訳が分からなかった。

「どうして山姥が俺を見知っているんです？」

「いや……何でもない。いまの話は忘れろ」

慌てて云いつくろい、与平は話をやめた。殴られなかったことに安堵しつつ、弥助は妙な違和感を抱いていた。父は何故、山姥が俺を見知っているかもしれないなんて思ったのだろう。

夕餉の間中、誰も話をしなかった。時折、むずがる赤ん坊をあやす母の音がするだけだった。

山姥が俺を知っているかもしれない――。

弥助はなかなか寝付けなかった。親たちがひそひそと小声で話を始め、弥助は眠ったふりして耳をそばだてた。

「きっとそうですよ」と、母のお里が云う。

「しかし、いまでも生きているかなあ。もう六年も経つんだぞ」

「どうにかして生きる術を見つけたんでしょう」

「考えられなくはないが……」

「それじゃ、弥助が見たのは本物の山姥だと云うんですか？」

「そんな化け物なんて俺も信じちゃいない。弥助が見たのは人に決まっている」

「だから、やっぱりそうなんですよ」

「そうかもしれないが、他の人かもしれない。あのときは八人いたんだ」

「他の人だったとしても、生きているのなら助けるべきでしょう」

「そうだな。とにかくそいつが誰なのか確かめなくちゃな。明日にでも御山に登ってみるか」

「村の人たちに相談した方がいいんじゃないですか？」

「そいつは後回しだ。騒ぎが大きくなれば、子供たちにあの話をしなくちゃならなくなる。あの罰当たりな話を……」

「でも、あれは仕方がなかったこと。当人たちも納得していましたし……」

「無理から納得してただけだ」

「それはそうでしょうけど……」

「とにかく、御山に登って山姥の正体を確かめてくる。村の人たちに相談するのはそのあとだ」

寝たふりをしていた弥助は、ますます目が冴えた。山姥は親たちの知っている誰かのようだ。親たちが知っているくらいだから村の人だろう。あのときは八人いた、というのも気になった。山姥は八人のうち七人をあの場で食った。おそらく残りのひとりも別の場所で——。それとも、残りのひとりが山姥に変化したのか。明日、父のあとをこっそりつけようと決め、弥助は眠りに就いた。

朝露の残る、一昨日の山道を再び登る。今日は、恐怖心は一切湧かなかった。雉や猿の鳴き声が不思議なほど気にならない。ただ、少しの罪悪感を抱いていた。親の秘密を盗み見するようで心苦しい。しかし、自分が実際に目にしたものが何であったのか、その好奇心は抑えがたかった。

与平のあとを、一定の距離を保ってついていく。山の中なので隠れる場所には困らないし、父が何処に向かうのかも分かっている。与平は、誰かがついてきているとは念頭にないようで、一度も振り返ることなく、ひたすら高みを目指していた。

祠に辿り着き、与平が足を止めて手を合わせる。父が足を止めたのはそのときだけだった。勾配がきつくなり、少しずつふたりの距離が離れ始める。大人と子供の足では、勢い、速さが違う。父に離されても、弥助は心配していなかった。行く先は崖に囲まれた、骸骨の転がっている乾いた広地だ。緑の山林に突如として出現する、まるで異空間のような、山姥の巣とも思える特別の場所、父はそこへ向かっている。

息があがり、足が疲れ切った頃に山が開けた。もうそこだ。弥助は歩みを緩めて父の姿を追った。岩に隠れながら捜すと、父はすぐに見つかった。骸骨のひとつひとつに手を合わせて広地の真ん中に立ち、崖の上を見上げている。弥助も崖の上を凝視した。一昨日も見た、幹の歪んだ樹々が立ち並んでいる。あのときは恐怖のあまり、いまにも襲ってきそうな物の怪に見えたが、こうして落ちて着いてみて見ると、何の変哲もない大木だった。あんなものに怯えた自分が腹立たしい。その陰に山姥が隠れているのではないかと思ったが、何もいなかった。

「誰かいるのか？」

突如、父が両手を口に添え、大きな声を出した。弥助はどきりとした。父は崖の方を向いたままで、自分の存在に気づいたのではないとすぐに分かったが、高鳴った弥助の鼓動はなかなか鎮まらなかった。

闖入者を威嚇するように、猿の甲高い鳴き声が辺りにこだまする。

「誰かいるのか？」

与平が再び崖に向かって声を発する。じっと佇んで反応を窺っている。与平は見上げたまま崖に近づき、しばらく様子を窺っていた。しかし、何も起こらず、さっきまでの猿の鳴き声もしなくなった。御山は静寂に包まれていて、山姥どころか猿でさえも遠くへ行ってしまったようだ。

与平が崖のへこみに手を掛けた。登る気だ。崩れる心配がないかどうか手に力を込めている。安心した与平が、今度は足を掛けると、その躰がふっと上がった。

岩の陰でじっと父の様子を見ていた弥助ははらはらする思いだった。父がどンドン崖を登っていく。登るのに不可能な高さではないが、落ちたら確実に怪我をするし、打ち所が悪ければ死に至るかもしれない。どうして父は、そこまでして山姥を捜し出そうとするのだろう、と弥助は思った。

与平の手足が蜘蛛のように崖を這う。一步一步、着実に上へと向かっていく。やがて与平の手が崖の上に到達した。登り終えた与平はさすがに疲れたようで、ぐったりとその場に腰を下ろした。しかし、ぐずぐずしてはいられないとすぐに山の奥に目を向け、歩き始めた。

父の姿が樹々の闇に消え、弥助はどうしたものか迷った。追いかけたかったが、とても崖を登られそうにない。かといって、この場に残っていつ戻って来るとも知れない父を待っているのは心細い。弥助に逡巡する間はなかった。急いで結論を出さなければ父を見失ってしまう。ふらふらと、それが正しいことであるかのように、弥助の足は崖の下に向かった。切り立つ崖に、とても登れないと直感したが、目の前にしてみるとそうでもなさそうだった。へこみは結構あり、掴まる箇所には事欠かない。これなら自分も上まで登れそうだ。ただし、力が果てれば落ちてしまうことに変わりない。怖じけそうになる自分を弥助は鼓舞した。こうしている間に山姥が現れるかもしれない。父を襲うかもしれない。父は信じていないようだが、あれはどう見ても山姥だった。

父がそうしたように、弥助も蜘蛛のように崖を這った。もし落ちたら——という邪念を振り払い、ひたすら上を目指す。掴むためのへこみを探しながら少しずつ這い登る。もう一息。崖の縁が目の前に迫り、弥助は最後の力を振り絞った。上半身が崖の縁を滑り、足が縁に掛かる。そして、とうとう弥助は躰を崖の上に投げ出すことが出来た。

躰を大の字に広げ、大きく息を吸い、ゆっくりと吐く。ふと見ると、樹々に隙間があり、そこから村が見下ろせそうだった。立ち上がって確かめると、思った通り村が見える。我が家も分かった。高いところから見下ろすのは気分がいい。弥助は嬉しそうに村の一軒一軒を眺めた。それにしても小さな村だ——倉持様の屋敷がひととき大きく見える。束の間の休息を終え、弥助は父のあとを追った。崖の上に道はなかった。ただ下草が踏み倒されており、父のあとを追うことは出来た。樹々に囲まれ、下草の生い茂る薄暗い中を歩く。先に目をやるが、父の姿はない。

下草に隠れて岩があちこちに転がっていた。弥助は何度も足の指をぶつけ、その度に声を出しそうになった。ぐっと堪えて先を急ぐと、父の後ろ姿がやっと見えた。音を立てないようにして樹々の陰を回り込む。父は悄然と一点を見詰めていた。それ以上先へ進もうとしていない。山姥の追跡を諦めたのだろうか。さらに回り込んで父の足元を見やった弥助は、その理由が分かった。行くべき道がなかった。地面そのものがない。父の前は深い谷になっており、向こうとこちらを厳然と隔てている。長い丸太でも掛ければ渡れないこともないだろうが、跳んで移るには遠すぎる。人間には無理だ。宙を跳べる物の怪なら先へは進めないだろうが——。父はどうするのだろうか。と見ていると、諦めの顔で引き返し始めた。崖のところまで戻り、下りていく。樹の陰から見ていた弥助は、そっと周りを見渡した。何かの気配が感じられ、自分と同じように、何処かの樹の陰から山姥が見ているような気がする。

父の姿が広地を横切り、山道に消える。それを見届け、弥助は樹の陰から飛び出した。崖を下りるのは登るよりも恐怖を感じた。そして崖を半分ほど下りたときだった。弥助は頭上に視線を感じた。躰が強張り、手足が動かない。何かが上にいる。崖の上から覗き込むようにして見ている。恐ろしかったが、確かめずにはいられなかった。恐ろしい山姥がいると思ったが、違った。

子供だった。何処にもいる普通の子供、五歳くらいの子供が無表情に立っている。こんな山奥に子供が——。疑問に思いながらも子供だったことに弥助が安堵すると、上にいる子供は表情を一変させ、弥助を睨みつけた。厭な思いが弥助の脳裏をよぎる。

「お前は誰だ？ どうしてこんなところにいる？」

弥助の問い掛けには答えず、子供は覗き込んでいた顔を引っ込めた。

ひょっとして山姥の子か。でなければこんな山の中にいるわけがない。

弥助は恐怖を覚えた。と、さっきの子供が再び姿を見せた。憎悪に満ちた顔をしており、子供の手には拳大の石が握られている。その手を振りかぶった。弥助は咄嗟に顔を伏せ、全身を崖に密着させた。石は背中をかすめて下に落ちた。次がくると思い、弥助は声を張り上げた。

「やめろ！」

声を出したのとほぼ同時に、左肩に激痛が走った。石が当たってしまった。

このままでは落とされる。崖の上の子供は自分を殺そうとしている。やはり山姥の子供だ。

子供は石をふたつ投げると次の石を拾いに行ったのか、姿が見えなくなった。やめろと云ってもやめるつもりはないだろう、すぐに戻ってくるはずだ。言葉は通じていないようだ。

今のうちに、と弥助は焦った。焦れば焦るほど足が空を切る。

「おい！」

山姥の子供が戻ってきて呼び掛けた。山姥の子は人の言葉を喋れた。話は通じるようだ。

弥助は懇願の顔を向けた。

「殺さないで……」

話は通じたが、山姥の子供に翻意は見られなかった。

「二度と来るんじゃねえぞ！」

子供の振りかぶった手が見えた。その瞬間、石が額に命中し、手足の力が抜けていった。固い地面に落ち、薄れいく意識の中で弥助は、山姥の子供が勝ち誇った顔で見下ろしているのが分かった。山姥の子供は何か気づき、慌てて走り去った。駆けてくる足音がする。弥助、と名前を呼んでいる。呼ぶ声が近づいてくる。大丈夫か、と云っている。父が助けに来てくれた——。父の腕の中で弥助は気を失った。

背中と額に痛みがある。目覚めた弥助は、あの恐ろしい出来事が夢ではなかったと悟った。危うく山姥の子供に殺されそうになった。山姥の子供の無慈悲で憎悪に満ちた表情が脳裏に蘇り、怖気を覚えた弥助だったが、見慣れた我が家の光景が目に入り、怖気はたちまち霧散した。

「やっと目を覚ましたね。このまま眠ったきりなんじゃないかって心配したんだよ。本当に心配ばかり掛けて……どうしようもない子だ」

悪態を吐きながらも、涙目になっている母のお里が傍らにいた。背中の赤ん坊はぐっすりと眠っている。反対側には妹たちもいた。松吉もいた。安堵の顔を浮かべ、弥助を見ている。

「本当に弥助は無茶ばかりする」と、笑って云う。

皆が気に掛けてくれて弥助は嬉しかった。その中に見えない顔があった。

「お父は？」

「今、倉持様のところへ行ってる。呼びつけられてね、もうすぐ帰ってくるだろうから、そしたらうんと叱ってもらおうからね」

そう云いながら、母がげんこつを突き出す。

「ごめんよ。もう黙って御山に登ったりしない」

「黙ってでも何でも、御山に登るんじゃないよ、死ぬところだったんだから。どんなに危ないか、これで思い知っただろ？」

「うん。でもね、景色はよかった。村も見えたし、この家も分かった」

「呑気なことを云って……」と、母が呆れた顔をする。

松吉が膝を寄せてきた。話を訊きたそうにうずうずしている。

「山姥には子供がいたって本当か？」

「ああ。山姥の子にやられたんだ。小さいくせに恐ろしい奴で、慈悲の心など欠片も持っていなかった」

妹たちが顔を青くする。それを見て、怖い話を聞かせたくないと思ったのだろう、母が険しい目を松吉に向けた。

「もう安心だろ。早く家にお帰り」と、追い返すように云う。

「元気になったら、また神社で遊ぼうな」

名残惜しそうに松吉が帰って行く。家族だけになり、弥助の心は申し訳なさでいっぱいだった。

「本当にごめんよ。お父も怒ってた？」

「怒るも何も……お前が死んじゃったんじゃないかって思ったそうだよ。崖から落ちて……背中を打って……。頭から落ちていたら死んでいただろうね。幸いそうじゃなかったからよかったけど、それでも額から血を流していたから、お前を担いで急いで御山を駆け下りてきたんだ。わたしもぐったりしているお前を見たときは駄目かと思った。息が少しずつ強くなってきて、もう大丈夫だろうってことになったとき、倉持様の家来が来たんだ」

「何しに？」

倉持の名前が出たときから弥助は疑問に思っていた。この辺りを支配している土豪の倉持幽源が、父になんの用があるというのだろう。

「お前が担がれて戻ってきたのを見ていた人がいてね、山姥に襲われたと思って倉持様に注進したんだ。それで詳しいことが訊きたいと連れて行かれたんだ」

「倉持様が山姥を退治してくださるの？」

「さあ……どうだか。それにしても、御山に子供がいたとは驚きだ。どんな風だった？ 顔とか格好とか……」

母の問い掛けに、弥助の脳裏にまたしても山姥の子供の恐ろしい顔が蘇った。崖の上から憎々しげに見下ろしていた顔――

「どんなって……見かけは普通の子供だった。だけど心がなかった。格好は……」

弥助は必死に思い出そうと努めた。しかし、着ていたものがどんなだったかまるで思い出せなかった。裸でないのは確かだったが――。

「格好は覚えていないよ。石を持っていたんだ。そればかりが気になって……」

「そうかい、そうかい。怖い思いをしたのに思い出させてごめんよ。そうかい、子供は生きていたんだねえ」

しみじみ云う母が弥助は奇異に思えた。山姥の子を気にかけている。山姥の子供が生きていようがいまいが構わないではないか。そもそも、山姥に子がいることなど、どうでもいいことだ。

がらりと戸が開き、倉持の元に行っていた父の与平が帰ってきた。厳しい顔をしている。弥助は半身を起こそうとしたが、背中に激痛が走り、思わず顔を歪めた。

「まだ起きるんじゃないよ」

母は弥助を押し留めると、父の元へ向かった。帰って来るなり、父は手に鎌を持った。

「これから山姥を退治することになった。倉持様の家来と村の者で行く」

父の声は何故か悲嘆に満ちていた。それを聞いた母の顔も暗く沈んでいる。

「わたしたちの考えているとおりでしたら悲しすぎます。子供はきっと……」

「そのことは俺も申し上げた。しかし、倉持様は聞いてくださらなかった。あんな何もない御山の奥で五年も六年も生きていたとしたら、それは物の怪に変化したからだと仰ってな」

「そんな……」

母は今にも泣き出しそうだった。山姥が退治されるのを悲しがっているのだろうか。

「大人しく寝ているんだぞ」と弥助に云い置き、鎌を持った父が戸口を出て行った。

「お願い」と背中の子を妹に託し、母も父のあとを追った。

弥助は横になっている自分が忌々しかった。自分が発見者なのに、山姥が退治される肝心の場面に立ち会えないとはなんという不運だろう。そして、自分を殺そうとした山姥の子供が退治されるのを見られないことが残念でならなかった。

それにしても——母は何故、あんなにも山姥や山姥の子を気に掛けるのだろうか。山姥に心当たりがあるようだった。父を追っていったのもただの好奇心ではなく、結末を案じての行動のような感じがする。

弥助は半身を起こした。背中に痛みが走り、息が止まる。息をゆっくり大きく吸うと、痛みは次第に治まってきた。立ち上がってみる。少し頭がふらついたが、足に痛みはなかった。

これなら行けるか——。

弥助は戸口を見詰めた。熱病に冒されたように焦点が合わない。しかし、意識ははっきりしている。そろりそろりと足を踏み出す。二歩、三歩と足を踏み出すごとに、これなら何とかかなりそうだ、と実感が湧く。

「寝てなくていいの？」と赤ん坊を腕に抱いた妹が訊いたが、弥助は無視した。

戸を開ける。外はすでに薄暗くなっていた。弥助は自分が半日近く気を失っていたことを知った。村は深閑としていた。村の大勢が御山に向かったようだ。遅れてなるものかと弥助は急いだ。

松吉の家にかかると、松吉が戸口の前に立ち、ぼんやりと御山の方を眺めていた。弥助に気づき、驚いた顔を向ける。

「出歩いたりして大丈夫なのか？」

「なんとかな」

「そうか。それならいいが、弥助、聞いたか？ 山姥退治が始まったぞ」

「聞いたとも。親父もお袋も行った」

「子供は行っちゃ駄目だって云われた。お前はいいよな、山姥も山姥の子供も見たんだから。俺も見たかったな。何せ、二度とこんな騒動はないだろうからな」

「駄目だって云われても俺は行くぞ。俺の話から始まったというのに、山姥が退治されるのを見られないなんて何とも悔しい」

「悔しいのは分かるが、大丈夫か？ まだ傷は痛むんだろ？」

「ああ、痛い。だが、幸いにも足は達者だ。傷の痛みよりも、あの山姥の子供がどんな最期を遂げるのか、俺は何としてもこの目で見たいんだ。そうしないと俺の気が治まらない」

「お前の気持ちは分かるが、無理なんじゃないか。御山を登るんだぞ」

「なあに、平気だ。ちょっとまだ頭がふらつくが、歩いているうちに治まるだろう」

「本当にお前は呆れた奴だな」と松吉が笑って云うと、弥助もつられた。

「お前も来たらどうだ？ あとで後悔するぞ」

「そりゃあ、分かってる。俺だって行きたいよ。だけどなあ……」

「怒られるのが怖いのか？ それとも山姥が怖いのか？」

「馬鹿云え。どっちも怖くない」

「だったら一緒に行こう」

松吉にも山姥を見せたくて期待の顔で誘ったが、松吉は逡巡した。

「怖くはないが、山道は狭くて危ないだろ？ 日も暮れてきたし……」

「危ないからこそ一緒に来て欲しいんだ。お前の助けがいる。頭がふらついてお前の助けがないと登れないかもしれない。頼むよ。一緒に来てくれよ」

「そうか……そう云われるとなあ」と腕を組み、松吉が考え込む。

「仕方ないな。連れて行ってやってもいいが、お前が無理そうだったら途中で引き返すからな」

恩を着せるように云う松吉に、弥助は苦笑いした。

並んで御山の麓へと向かう。ときどき、松吉が弥助の具合を訊く。頭にも背中にもまだ痛みが残っていたものの、弥助は何ともないとうそぶいた。

「これから登るとなると真っ暗になるな」

心配そうに御山を見上げて松吉が云う。明かりがなければ余計に危険だ。大人たちは松明を準備しているだろうが、弥助たちは持っていなかった。持っていたとしても松明を灯せば大人たちに見つかってしまうが――。

明かりがなくても弥助は楽観していた。闇となった山道を歩いたことはないが、二度も登っていて、何処がどうなっているかは分かっている。

「俺に任せておけ。祠はすぐそこだ。祠を過ぎてしばらく行くと勾配がきつくなる。木の根や剥き出しの岩があるから気をつけろよ。狭いところはそのときになったら教えてやる。そうこうしているうちに広地に着く。ふたりで話でもしながら登ればあっという間だ。さあ、急ごう。こんな危険を冒して登っているのに山姥が見られなかったら悔やんでも悔やみきれない」

松吉に代わって弥助が先を歩く。

祠に着き、ふたりは手をあわせた。しばらく歩き、勾配がきつくなるとふたりの口数は減った。

猿の鳴き声が聞こえた。

「襲ってこないだろうな」と、不安そうに松吉が訊く。

「大丈夫だ。大勢の人が登ったから驚いているんだろう」

連れて行ってやると云っておきながら猿に怯えている松吉が、弥助は可笑しかった。

急な勾配が続く。松吉に山道の様子を教えながら登っていた弥助は歩みを止めた。

「どうした？」と、松吉が後ろから問い掛ける。

「しっ」

弥助は振り返り、唇に指を当てた。

「もうすぐ広地に着く。松明が見える……」

「やれやれ。やっと着くのか」

溜め息混じりに松吉が云う。

「まだ騒ぎになっていないから山姥は捕まっていないようだ。肝心の場面が拝めるぞ」

嬉々として弥助はやおら歩みを始めた。松吉もあとに続く。

岩の陰に隠れながら広地に近づく。多くの松明で広地は昼のように明るく、大人たちは手に手に鍬や鎌を持っていた。不安を払拭するかのよう、近くの者どおしでざわざわと話をしている。

「お前の親もいるぞ」と、松吉が話し掛ける。

その姿を捉え、弥助は頷いた。

「うちの親は山姥退治に気が進まなかったようだ。何だか悲しそうな顔をしていた」

「悲しそうな顔？ どうして？」

「さあ、よく分からない。山姥を憐れんでいるのかもな」

弥助の言葉に松吉が気色ばんだ。

「山姥は物の怪だぞ。それを憐れむのか？」

「思いつきで云ったまでだ、そんなに目くじらを立てるな」

倉持の家来たちのひとりが前に進み出ると、ざわめきが鎮まった。皆が一斉に視線を向ける。

「まずは仏の供養をしよう」

鍬を持つ者が骸骨の横に穴を掘る。別の者が骨を拾って穴の中に納める。土が被せられ、七つの墓らしい土盛りが出来上がった。皆が沈痛に手を合わせ、念仏を唱える。すすり泣く女もいた。

低く流れていた念仏が止み、先の家来が崖の上を窺った。広地は松明の明かりで照らされているが、崖の上は光が届かず黒々とした闇が広がっている。家来が崖に近づく。弥助は家来が崖に登るのかと思った。しかし、家来は崖のすぐ下まで来ると歩みを止めた。後ろに控えている他の家来たちを、準備はいいな、とでも云いたげに見やる。他の家来たちはそれに応えて頷いた。鎧兜こそ着けていないものの、腰には刀が差してある。先の家来が再び崖の上に目を移した。

「やい、山姥！ いるのであろう？ 隠れてないで出てこい！」

家来の声が暗空に響く。村人も皆、崖の上に目をやり、固唾を呑んでいる。

「これだけの人がいるのに出てくるかな？」

松吉が弥助を肘で小突いて云う。

「さあな。殺されると分かったら出てこないかもな」

「そうだな。逃げたかもしれないな」

「いや、まだ逃げてはいないだろう。きっと闇の中から様子を窺っているはずだ」

弥助には確信があった。憎しみの塊だった、あの山姥の子供がむざむざ逃げ出すとは思えないし、山姥にしても、今にして思えば、暮らしを乱せば容赦しないという悲愴な覚悟があったように感じられる。

「出てこなければこっちから行くぞ！」

先の家来が吠えるように云うと、後ろの村人が地面の置いていた梯子を持ち上げた。数人がかりで崖に架けようとする。

そのときだった。

「あれを見ろ」

松吉が崖の上を指さして云った。見ると、宙に火が揺れている。揺れながら近づいてきている。崖の下でもざわめきが起こった。

「火の玉だ！」の聲が拡がる。

弥助は目を凝らした。

「よく見ろよ。ただの松明だ。山姥が松明を照らしてやってきたんだ」

松明の灯りが崖の縁で止まり、山姥の姿がはっきり見えた。確かにあのときの山姥だった。命からがら逃げ変えたときの恐怖が蘇る。

山姥が恐ろしい顔で崖の下にいる人々を見渡す。

「今すぐ御山を下りろ！」の音が暗空に響く。

恨みのこもった不気味な声に、崖の下は静まりかえった。が、それは長くは続かなかず、再びざわめきが起こった。

「あれは……お鹿さんじゃないか？」

「そうだ。お鹿さんだ……」

その声は弥助たちにも届いた。

「お鹿さんて……お前の婆さんじゃなかったか？」

「ああ。流行病で死んだはずだが……どうして生きているんだろう？」

幼い頃に見た祖母の姿と崖の上の老婆は似ても似つかなかったが、云われてみれば確かに険しくした祖母の顔がそこにあった。

先の家来がひそひそと話をする村の人たちを振り返った。

「昔は人だったかもしれないが、今や物の怪だ。物の怪に化けたんだ。でなければとっくに死んでいる。こんな山の中で生きられるわけがないからな」

弥助は奇妙な思いがした。

でなければ——もなにも、祖母は流行病でとっくに死んでいるはずだ。死んでいなかったのだろうか。そういえば、祖母の死は親から聞かされただけで、その遺体も葬式も記憶になかった。

崖の上の山姥が口を開いた。

「ふん、生きる術はあった。だからこうして生きている」

「それならどうやって生き延びたんだ？ 教えてみろ」と、先の家来が眉根を吊り上げて訊く。

「どうだっていいことだ」

老婆の投げやりな答えに、先に家来が薄笑いを漏らした。

「それみる、答えられないじゃないか。おおかた山の獣を食っていたのであろう。退治してやるからそこを動くな！」

家来たちが崖に梯子を掛ける。先の家来が梯子に足をかけようとする、ひとりの村の男が進み出てきて止めた。必死の形相で先の家来の前に立ちふさがる。

「もうしばらくお待ちください」

弥助の父、与平だった。母のお里も遅れて駆けつけた。

「本当に山姥ではないのかもしれませんが。今しばらく……」

「お前たちは？」と、先の家来が訊いた。

「崖の上にいる老婆の息子夫婦です。お願いでございます。あの老婆と話をさせてください」

息子夫婦と聞き、先の家来もすぐの退治を思い留まった。

「よかろう。だが、山姥に妙な動きがあったならすぐに退治に向かうからな」

父の与平は有り難そうに頭を下げ、崖に向き直った。

「おふくろ！ 生きてたんだな。すまなかった……すまなかった」

謝りながら突然、父が泣き出した。傍らの母も泣いている。

「弥助の親はどうして泣いているんだ？」と、松吉が怪訝そうに訊く。

「さあ……」

弥助にも訳が分からない。

六年前に死んだと聞かされていた祖母は生きていた。山姥に変化して生き延びたと倉持の家来は云っているが、親たちはそうではないかもしれないという。そして何故だか謝っている――。

「与平……」と、崖の上の老婆が声を漏らす。

「おふくろ。すまなかった。赦してくれ」

「赦すも何も、あれは村の総意だった。食うものがなかったのだから仕方がないと諦めたことだ。与平もそれに従っただけだから気に掛けなくてもいい。もう放っておいてくれ。あの日、僕たち八人は棄てられた。村とは縁が切れた。もう御山には来るな」

村の人たちが沈痛の面持ちになった。あちこちで悔悟のすすり泣きが聞こえる。倉持の家来だけが違っていた。憤怒に顔を紅くしている。

「騙されるな！ この老婆は山姥だ！ こんな山の中で生きていられるわけがないんだ！」

突然、石つぶてが皆の頭上に飛んできた。騒然となり、石つぶての方向に目を向ける。すると老婆の持つ松明の灯りの元に憎々しげな顔の子供がいた。

「帰れ！ 帰れ！」と怒鳴り声を上げる。

「あれが弥助を襲った山姥の子供か？」と、松吉が訊く。

「そうだ。あの顔……忘れもしない」

「山姥の子……歳からいって孫じゃないか」

孫——ということは弟かもしれない、と弥助は思った。弟は五年前に山姥に攫われたといわれている。祖母は弟を攫ったのか？ 山姥の子供は村の子と同じような着物を着ていた。そしてよく見ると、ぼろを着ていると思った山姥も普通の村の人と何ら変わらなかった。

「生意気な餓鬼め！」

先の家来は叫ぶと、近くにいた村人の松明を取り上げ、梯子を駆け上がった。

「来るな！ 盗人！ お前たちにお宝を渡してなるものか！」

梯子を登っていた先の家来の手が止まった。

「お宝？ お宝とは何だ？」と、上の子供に訊く。

上の子供は、しまった、とばかりに口を押さえ、そしてまた石を投げた。

「これでもくらえ！」

石が命中し、先の家来が梯子から落ちた。下にいた村人が助け起こす。

「おのれ、赦さんぞ！」

今度は、先の家来は松明を持たなかった。左手で頭を護りながら梯子を登る。子供の投げる石がいくつか当たったが、登る手は止まらなかった。

老婆と子供は奥の闇の中へ消えていった。

家来たちに続き、弥助の父、与平も梯子を登った。何人かの村人もあとに続く。弥助たちは息を殺して事態を見守った。

「すぐに山姥は捕まるだろうな」と、松吉が云う。

「ああ。あそこには逃げ場がない」

崖の先は谷になっていて、その先へは行けない。老婆と子供が見つけれられるのは時間の問題だろう。弥助は胸中に疼くものを感じた。祖母と弟かもしれない——そう思うと、子供には酷い目に遭わされたとはいえ、憐憫の情が湧いた。こんな山の中で暮らさざるを得なかった特別の理由があるようだ。それは村の総意だった——。総意とは何だったのだろうか？

崖の下はひっそりとしていた。村の誰もが視線を上に向けている。顔を動かさないでいる。そして、しばらくしてざわつき始めた。すぐに捕まるはずの山姥、もしくはお鹿がいつまで経っても捕まらないことに苛ついている。

「どうなっているんだ？」

「いつまでかかっているんだ！」

ざわめきの中、松明の灯りが崖の縁に集まってきた。先の家来が進み出て首を振る。

「何処にもいない。やはりあの老婆は山姥だ！ 谷を跳んで向こうへ逃げたに違いない！」

翌朝、弥助は父を手伝って畑に出ていた。鍬を振っていると、前方の父が動きを止め、御山の麓に目をやっている姿が目映った。そこには二十人ばかりの、昨日とは打って変わって鎧兜に身を包んだ侍たちが歩いており、先頭は倉持幽源だった。悠然としたその様は、己の才覚のみで生きてきたとの自信に満ちていた。

「弥助、お前も来るか？」と、父が厳しい顔で云う。何かの決意が窺える。

「何処に？」

「決まっているだろう、御山に、だ」

「行ってもいいの？」

「お前のことだ、勝手についてくるだろう」と、擲諭して云う。

夕べのことはばれていないと思っていたが、妹か弟が喋ったようだ。

「うん」と云い、弥助が苦笑いすると、弥平も小さく笑った。

鍬をその場に置き、ふたりは御山を目指した。

道々に弥助は父に訊いた。夕べ、親たちは村の人たちとの会合で遅くまで帰ってこず、いろいろ訊きたかったことがやっと訊けると思った。

「崖の上にあのお婆さんは、うちの婆ちゃんなの？ 流行病で死んだって聞いていたけど」
斜め前を歩く父の肩が少しだけ震えた。

「そうだ。流行病で死んだわけじゃない」

「それじゃ、どうしていなくなったの？」

「いなくなったわけじゃない……」

振り向いて答えた父の顔は険しく、悲しそうだった。

「まだ死んでなかったんでしょ？ 喧嘩でもして出て行ったの？」

「そうじゃない。御山に……棄てたんだ」

「棄てた？」

弥助は息が止まるほどに驚いた。

「もうお前はものの分別がつく歳だから話してもいいだろう。棄てたといっても、婆ちゃんのことを嫌いになったから棄てたとか、そういうことじゃないんだ。お前は覚えていないだろうが、六年前、この辺りで大きな戦があった。倉持様のお陰で村は何とか護られたが、畑や田んぼはめちゃくちゃに荒らされた。おまけに日照り続きで作物は実らず、村の誰もが飢えていた。このままでは村が滅びてしまう……だから仕方がなかったんだ。村の総意で年寄りには山へ行ってもらうことになった。それで八人の年寄りが御山に棄てられた。口減らしだ。婆ちゃんもその中のひとりだった。他の年寄りも婆ちゃんも、まだまだ元気だった。だが、村のために犠牲になってもらうしかなかったんだ。良くないことは分かっていたが、他に方法がなかったんだ……」

父が山道の歩みを速め、弥助も必死についていった。

父の誘いに、何故御山に向かうのか、その理由を訊かなかつた弥助だったが、今では推察がついている。祖母を護るためだ。先に行った倉持隊は祖母を山姥と決めつけており、殺そうとするのは目に見えている。二十人ばかりの侍を相手に、父にどれだけのことが出来るのかは分からないが、自分も力になってあげよう、と弥助は思った。異常な状況下に身を置かざるを得なかつた祖母を護ってあげたい――。

祠を過ぎたところで先に行く倉持隊が目に入った。蟻の行軍のように細長い。重装備が災いしているのだろう、その歩みは遅かつた。

「弥助、こっちだ」

父が山道を外れ、山の繁みの中へ分け入っていく。倉持隊を追い抜くつもりのようなのだ。低木に痛めつけながらも、弥助は急な斜面を登つた。

「あの子供は誰なの？」と、息を切らせながら弥助は訊いた。

「多分……お前の弟だろう。確証はないが、他に考えられない」

「やっぱり。それじゃ、婆ちゃんが弟を攫つたの？」

「村ではそういうことになっているな。だが……事実は違う。お前の弟も……棄てたんだ」
棄てた――赤ん坊だつた弟を棄てた。

自分の親が本当にそんな残酷なことをするだろうか。弥助は信じられなかつた。

「どうして？ どうしてそんなことを……」

父の足が一瞬止まりかけた。しかし、父は尚も山中を急いだ。

「次の年も同じだつた……。皆が飢えていた」と、苦しそうに呟いた。

「そういえばひもじかった覚えがある」

弥助はあの頃のことを徐々に思い出した。毎日腹を空かせ、妹も弟も泣いていた。

「食うものがろくになかったから、お里の乳の出が悪かった。赤ん坊は死にそうだった。命がもったとしても、いずれ食いは尽きてしまう……。先に何の望みもなかった。この手で赤ん坊を殺そうと思った。だが、そんなことが出来るはずもない。だから……。御山に棄てた、婆ちゃんと同じように。酷い親だと思うだろうな。俺は赤ん坊を棄てたと村の人に云えなかった。それで...山姥の伝説を利用した。山姥に攫われたことにした。そう思おうとした。そう思えば少しは気が楽になった。しかし、天罰だったんだろうな、お前が御山でおふくろを見つけてしまった……」

弥助の胸を暗い闇が覆う。自分の親が産まれたばかりの赤ん坊を棄てていたという事実——自分が産まれたとき、同じ状況だったなら自分も棄てられていたのだろうか。弥助は恐ろしくならなかった。

「でも……。赤ん坊は死にそうだったんでしょう？ どうやって……」

「そうだな。そこがよく分からない。おそらく棄てられた赤ん坊を婆ちゃんが見つけてくれたんだろうが、どうやって育てたんだろうな。婆ちゃんだって棄てられて一年が経っていたんだ。どうやって生き延びたんだか……。まあ、どうであれ、よかった。弥助も手伝ってくれ、お詫びに、これから婆ちゃんとあの子供を助けなければならない」

弥助もそのつもりだった。弟に違いない——恐ろしかった山姥の子への憎しみは消えていた。

険しい山の中、道なき道を歩く。

眼下に倉持隊が見えた。弥助たちに気づいている様子はなかった。

「どうやら追いついたな。弥助、急ぐぞ。先に婆ちゃんたちをつけるんだ」

すぐに倉持隊を追い越した弥助たちは、歩みを緩めなかった。身体中に引っ掻き傷を作りながらも先を急ぐ。十分に倉持隊を引き離れたところで山道に戻る。ほっとしたのも束の間、父の歩きはますます速くなった。

「夕べ遅かったけど、村の人とどんな話をしていたの？」と、弥助は訊いた。

「まだ婆ちゃんを山姥だと思っている人もいたからな、その説得だ。説得して、山姥退治など考えないでくれと訴えた。ほとんどの人は信じてくれた。だが、一部の人はそうじゃなかった。倉持様の家来も云っていたように、人がこんな何もない御山で何年も暮らせるはずがないからな、山姥に変化した思っている人もいた。そこは俺も何とも云えなかった。それでも、村へ降りてこないようなら退治はしないと約束してくれた。倉持様にも、今日にも訴えに行くつもりだったが、先を越されてしまった……」

「倉持様も分かってくださればいいのに……何もこんなに早く退治しに行かなくても……」

「そうだな。倉持様を説得できれば良かったんだが……説得できたとしても、倉持様は御山に向かっただろうな」

「どうして？ 退治する必要はないのに。婆ちゃんのことを嫌いなの？」

「そんなことじゃない。別の目的だ……おそろくな」

「それは？」

「俺にもまだ分からないが、婆ちゃんのところに行ってみれば分かるだろう」

広地に着いた。崖には梯子が架けられたままだった。

梯子を登り、崖の上から振り返って下を見る。倉持隊はまだ見えない。

「ここからが問題だ。婆ちゃんたちがどうやって姿をくらませたのか、それを探らなければ……」

弥助は小さく頷いた。祖母たちが宙を跳ぶはずがない。何処かに抜け道があるはずだ。

父が崖の左側へ向かう。父の指示で弥助は右に回った。樹々の間を歩き、秘密の道を探す。時間がなかった。もうすぐ倉持隊がやってくる。弥助は目を皿にして探した。樹々の陰、岩の後ろなどに足を運んだが、それらしいところは何処にもなかった。

「弥助、こっちだ」

父の与平が向こうから声を掛けた。弥助が走っていくと、そこは岩だらけの場所で、多くの岩が重なり合っていた。

「ここだ。遠目にはひとつの岩に見えるが、隙間がある」

弥助は目を凝らせた。なるほど、色合いが同じでひとつの岩に見えるが、うっすらと差している影はふたつに分かれていた。

崖の方から、急げとか、気をつけろとか、人の声がした。倉持隊が追いついたようだ。弥助は父に続いて岩の間に身を滑らせた。ここも追っつけ倉持隊に見つかってしまうだろう。

岩を抜けると溝があった。水の流れて出来たもので、そのまま下へ落ちるように続いている。とても降りられそうになかったが、先を歩く父が斜めに向きを変えた。足場があったようだ。乾いた斜面を進んでいく。道らしい道はない。足を踏み外せば簡単に谷に落ちてしまいそうで、下を覗き込んだ弥助は身が縮まった。下には岩だらけの、流れの速い川が流れていた。

斜面を少しずつ下り、谷底についた。谷の両側は切り立った崖が迫っている。大きな岩を回り込み、ときに川の流れに足を入れて先を目指す。父は熱心に辺りに目を這わせていた。小柄な祖母と子供でも歩けそうな箇所を探しているようだ。

「倉持様は来ておられるか？」と、父が訊く。

弥助は振り返った。

「まだ見えない」

まだ見えないが、やってくるのは確実だ。やがて岩の隙間を見つけるだろう。

気持ちを引き締め、弥助は再び歩き出した。と、父が腕を組み、思案している。視線の先には斜面があった。さっきの乾いた斜面と打って変わり、下草が生えている。父は、今度は川の上流に目を転じた。上流へ進むか、斜面を登るかを思案しているようだ。父がおもむろに斜面を登り始める。弥助もあとに続いた。

「どうしてこっちにしたの？」

弥助の問い掛けに、父は笑って首を振った。

「理由はない。何となく……だ」

斜面を登り、森の中に入った。樹々の間を、父は己の勘だけで歩いていた。その先に祖母がいるのを少しも疑っていないようだった。

登ったり下ったりが何度か続いたあと、父の足が止まった。驚きに目を瞠っている。弥助は駆け寄った。父の視線の先を弥助も見た。

何という景色——

山一面が薄紅色に染まっている。何かの花が咲いている。桜とは違うようだ。

こんなにも美しい景色を弥助は見たことがなかった。

「これは……」と、思わず声が漏れた。

「桃だ。桃が群生している。見事なものだ……」

桃——

弥助はよだれが出そうだった。食べたことはないが、甘い果物だと聞いている。

薄紅の一面を目指して父が急ぐ。なだらかな斜面を下っていく。

近づくにつれ、心なしか、弥助は甘い匂いに包まれている気がした。

どういうわけか、桃の木の下には枯れ枝が敷き詰められていた。

粗末な小屋があった。煮炊きをしているのか、煙が上がっている。あの子供が戸口に立ち、弥助たちを睨んでいる。子供が告げたのだろう、祖母も姿を現せた。

「おふくろ……」と、父が呟く。

「何しに来た」

祖母の物言いは冷厳だった。

「何しに来た、はないだろう。心配してきたんじゃないか。村へ帰ろう。いろいろ云う人がいるかもしれないが、俺が何とかする」

「嫌だ。儂はここを離れない。ここが儂の安住の地だ、村じゃない」

「そんなこと云うなよ。悪かった。謝って済む話じゃないが、今は暮らし向きが良くなった。だから食うには困っていない」

「また飢饉になったらどうする？」

父は返答に窮した。

「それみろ。そうになったら儂はまた棄てられるだろうな。何も恨み言を云ってるんじゃない。お前たちが辛かったのは良く分かっている。あれは仕方のなかったこと……家族を護るためには誰かが犠牲にならなければならなかった……だから恨んじやいない。だが、あんな思いをするのはもうごめんだ。御山で何があったと思う？」

祖母が悲しい顔をする。

父は首を振った。

「八人の年寄りが棄てられた。皆が、村のためだ、家族のためだと言いくめられて連れてこられた。誰もが観念していた。老い先短いものが先に逝く——それが当然だと思っていた。だから毎日念仏を唱えた。極楽浄土へ行けますようにと必死に祈った。そんなある日、加助爺さんが話をしたんだ、ここへ連れてこられたのは加助爺さんのせいかもしれないって」

「どういうことだ？」

「加助爺さんは倉持様の本当の顔を知ってしまったんだよ。村のためにいろいろ尽くして下さっていたが、それは村の人を欺くため。倉持様は、表向きは質素な暮らしをなされていたが、その実、贅沢に暮らしておいでだったそうだ。村が飢えているというのに、頓着されずに旨いものを食っておられた。屋敷の修繕に赴いた加助爺さんが垣間見たんだ、豪勢な酒宴を。それが支配者の特権だといわれればそうかもしれない。兵糧米も溜め込んでおられたようだ」

「それをほんの少しでも分けてくだされば、年寄りを山に連れて行かなくとも済んだ……」

「そうだ。逆に、倉持様は年寄りを棄てるように提案なされた。村の者から自然とそういう話になったことになっているが、実情は違う。年寄りには年寄りで仲が良かったからな、加助爺さんの口から善人面した自分の、本当の姿が広まるのを恐れられたんだ」

「そうだったのか……だからあんなにもおふくろのことも目の敵にしていたのか」

「儂を化け物扱いしくさって。倉持様の方がよほど化け物だ」

「その倉持様がもうすぐやってこられるぞ」

「なに！」

祖母の顔が怒りで紅くなる。

「二十人ばかりの兵を引き連れてきておられる。おふくろを殺すつもりだろう。いや、そればかりじゃない。他の目的もあるようだ」

父がぐるりと辺りを見渡す。弥助もつられて見た。桃の木が一面を埋め尽くしている。

「他の目的？」と、弥助は父に訊いた。

父は、前にははっきりと認識していなかったが、この景色を見て確信したようだ。

「この桃だ。どれくらいあるが分かんが、相当な金になるだろう」

「ああ、金になる。だから僕は生き延びられた。山に棄てられたあと、しばらくは木の実などで食いつないでいたが、やがて食べ物は乏しくなった。時期に死ぬ——そう覚悟を決めていたはずだが、簡単には死ねなかった。そして争いが始まった。僅かな食べ物をめぐって喧嘩が始まり、ついには殺し合いになった。僕は恐ろしくなって必死に逃げた。崖を登り、川に降りていった。お前たちが来た道だ。あのときは夢中だった。恐怖から逃れるために命がけで駆けた。気がついたらここへ来ていた。一瞬、僕は浄土へ迷い込んだのかと思った。逃げているうちに死んでしまったのだろうか——そんな気がした。だが、もちろん死んではいなかった。一面の桃を前に、僕は助かったと悟った。たくさんの桃の実がなっていて、皆に報せようと思った。それで引き返したんだが、遅かった。崖の上から見た光景は悲惨だった。七つの骸が虚しく転がっているだけだった。僕はひとりぼっちになってしまった。泣いた。泣きながら、御山を降りたいと思った。お前たちとまた暮らしたいと願った。だが……そうするわけにはいかない、倉持様がおられるから。僕はひとりで暮らした。山を越えた向こうの里に桃を持って行き、いろんなものと交換した。ときには城下へも行った。お陰で何とか暮らしていった」

あの七つの亡骸は年寄りたちによる殺し合いの結果だったのか——

弥助はぞっとした。

父が目の前の子供に顔を向ける。

「だからこの子も生き延びられた……」

「ああ。ここで暮らし始めて一年後だった。儂はときどき、村が恋しくなって崖の上から村の様子を眺めたりしていた。いつもは崖の上で留まっていたんだが、遠くで赤ん坊が泣いている気がして儂は山道を下りてみた。どんどん赤ん坊の泣き声は大きくなり、やがて祠の前に赤ん坊を見つけた。何処かの馬鹿な親が棄てたんだろう、酷いことだ」

悲痛の顔で父が子供の前にひざまずいた。子供の手をとる。子供は驚いて手を引っ込めようとしたが、父はその手を離さなかった。

「名前は何という？」

「長助……」

目をぱちくりさせ、訝しげに父を見やる。

「赦してくれ。俺がその馬鹿な親だ。祠に俺が棄てた……」

父が泣いている。その横顔を祖母がはたいた。

「お前だったのか！ 馬鹿者が！ 赤ん坊を棄てるとは畜生にも劣る」

「済まない。長助は死ぬ寸前だった。乳がなくて、あと二、三日で死んでいただろう。死に目を見るのは忍びなかった……」

「年寄りはまだいい、先が短いからな。だが、赤ん坊はこれからじゃないか。これからの命を棄てるとは……」

「済まない……済まなかった、長助……」

父がひしと長助を抱きしめる。

長助はどうしていいか分からずに、呆然としていた。

祖母はまだ何か云い足りないようだったが、父に向けていた視線を外した。弥助の背後の、遠くを見ている。弥助は振り返った。そこに見えたのは兵隊だった。整然とした倉持隊が真っ直ぐに向かってきている。

「ついに来たか……」と、祖母が声を漏らす。

父も振り返った。

「逃げろ、おふくろ」

「ふん。儂は逃げない」

祖母が倉持隊を睨み付ける。

倉持隊は歩みを止めた。少し離れて対峙する。

「こんなところがあったとは……。見事な桃だな」

先頭の倉持幽源が舞い散る花びらを目で追いながら、薄笑いを浮かべて云う。

「何をしに来られた」と、祖母が云う。

「何をしに？ 決まっているではないか。山姥退治よ。村に悪さをする山姥を退治しなくては村人が安心して暮らせないからな」

「山姥であってもなくても退治なさるつもりでしょうに……」

「どうだかな。そんなことはどうでもいい。大人しくここを引き渡せ。でないと本当に退治されることになるぞ」

「脅されても儂は何処へも行きませんぞ」

倉持から笑みが消えた。

「命が惜しくないようだな」

「ええ、惜しくはございません。あなた様にここを渡しても、どうせろくなことには使われな
いでしょうから。贅沢のために使われるか、人殺しの武具を充実するために使われるのが落ちで
しょう」

「武具に金を掛けるのは武人の務めだ。だからこそ村を護ることが出来るのではないか。そ
れに……贅沢だと？ おおかた加助から話を聞いたのだろうが、加助は何か誤解していたよう
だな。儂の暮らしぶりは質素なものだ、誰もが知っている」

「だったら村の管理にすればいいではありませんか。村の皆で分かち合えば、今後、飢饉が来て
も誰かを御山に棄てなくともいいようになりましょう」

「そうだな……」

倉持の歯切れは悪かった。

「約束していただけませんか？ この桃は村の皆で分け合うと」

祖母の言葉に、倉持が渋い顔をみせる。

「それはできんな」と云い、近くの家来に目配せをした。

家来は頷くと、つつと前を出た。腰の刀に手をかける。

「おのれ、山姥！ 退治してくれる！」と、吠えた。

キラリと光る刀身に弥助は戦慄を覚えた。

と、弟の長助が父の腕を振り切り、家来と対峙した。弥助は面食らった。死を恐れていないよ
うだ。父があわてて後を追ひ、長助を背中から抱える。

「盗人め！ お宝は婆のものだ！」と、長助が憎々しげに云う。

「おふくろ、逃げろ！」と、父が必死の形相で訴える。

さすがに倉持の本気を悟ったようだ、祖母が後退った。

「どうあっても儂を退治したいようだな」

祖母は小屋に隠れた。

前では父たちと家来が睨み合っている。

「そこをどかんか！」

「どうか刀を収めてください。なにも老婆を殺すことはないでしょう」

「お前たちも殺されたいのか！」

父も長助も殺される、と弥助は思った。弟の長助が命をかけているのに、足がすくんで動けない自分が弥助は恨めしかった。

そのときだった。

小屋に隠れたはずの祖母が外に出てきた。手に火のついた薪を持っている。

「人殺しの道具に化けるくらいならこうしてくれる」

そう叫ぶと、祖母は桃の木の下に敷き詰められていた枯れ枝に次々と火を移した。こうなることを想定して用意していたようだ。

火柱があちこちで立ち上がる。火の回りは速かった。あっという間に燃え広がり、一面が火の海になった。煙が辺りに満ちる。

炎と煙から逃れるために、弥助は父の元に駆け寄った。父も倉持たちも、誰もが燃える桃の群生を呆然と見ていた。炎の上空を薄紅の花びらがひらひらと舞っている。

炎の中に駆け込もうする長助の腕を、父がとる。

「離せ！ 婆を助けるんだ！」と、長助が叫ぶ。

「馬鹿者！ おまえが行ってどうなる？ どうなるものでもないではないか」

「けど、婆が……婆が炎の中に……」

弥助は炎の海に目をやった。祖母の姿はどこにも見えない。炎は祖母の怒りが移ったかのように猛り狂っていた。

倉持が呆然としている家来を叱咤する。

「早く火を何とかしないか！」

倉持の顔色を窺いながら家来たちは及び腰で炎に近づいたものの、やれることは何もなかった。なおも、何をしている、と叱りとばした倉持だったが、次第に近づいてくる炎に、ついには何もできないことを悟った。

「あのばばあのせいで台無しだ」と、憤懣やるかたなく云う。

火の勢いに弥助たちは後ずさった。倉持たちも後ずさる。

火は燃え続けている。山の斜面のほとんどが火に包まれている。

「仕方がない。引き上げだ」

桃の群生は燃え尽きるだろう。お宝を諦め、倉持隊は山の中へ消えていった。

自分たちはどうするのだろうと弥助は父を見た。父はまだその場を動きそうになかった。炎の中を目で追っている。祖母を捜しているのだろう。弥助も捜した。しかし、燃え上がる炎の中に、動くものは何もなかった。

「婆……」

長助が力なく泣き崩れる。祖母の死を覚悟したようだ。

弥助も悲しくなった。あの火の勢いからいって、とても逃げ切れるとは思えなかった。

祖母たちが住んでいた小屋にも火が移った。粗末な小屋ではあったが、長助にとってはかけがえのない家に違いない、燃え上がる小屋を寂しそうに見ている。

「婆……」

呻くように声を漏らす長助を、父が抱きしめる。三人はまた後ろに下がった。火の勢いはいっこうに衰える様子がなく、その場には命に関わりそうになってきた。

「お袋の行方が気になるが……ひとまず村へ帰ろう」

父が長助の手を引っ張る。嫌々ながらも長助は父に従った。弥助も父たちの後に続いた。山には入る前に振り返ってみると、永遠に燃えそうな炎を覆うように白い煙がたなびき、薄紅の花びらが舞っていた。あんなにも美しかった景色は夢だったのだろうか、と弥助は思った。

山は三日間にわたって燃えた。村からも高く伸びる煙が見え、煙が呼び込んだのか、四日目に雨が降った。降り続く雨に、煙は次第に細くなり、ついには見えなくなった。

弥助は父とともに御山に登った。長助もついてきたが、母が許さなかった。まだ危ないからと泣いて頼まれては長助も突っぱねられなかったようだ。長助は不満の顔をしながらもどこか嬉しそうだった。

御山は麓から煙の臭いがした。登るにつれ、臭いが濃くなる。獣たちは逃げ出したのだろう、山には雨の音だけがあった。崖を登り、川に下り、緩い斜面を上る。目の前に景色が広がった。つい四日前には目も眩むような美しい景色だったが、今は無惨でしかなかった。

黒一色の世界――

ほとんどの桃の木は燃え尽きており、わずかに残っている木も炭と化していた。

何もかもが変わってしまった。祖母の怒りが美しいものを灰燼に帰してしまった。

「痛ましいな……」と、父が溜め息混じりに云う。

「そうだね……」

炭と化した倒木の間を縫い、弥助は小屋の跡へと歩き出した。

屋根の石、かまど、燃え残った板など、小屋の名残がいくつかあったが、祖母がそこで暮らしていた証は何もなかった。父は、と見ると、父はかつて桃の木が群生をなしていた辺りを歩いていた。下を向き、何かを探している。祖母の亡骸を探しているのはすぐに分かった。弥助も父に歩み寄り、黒い地面に目を向けた。

「何かあった？」

弥助の問いに父が首を振る。

「何も……」

父がさらに地面に目をはわす。

地面には小石や木の燃えかすが落ちているだけだった。何もない。

雨で足がぬかるむ中、ふたりはくまなく探した。あれだけの火の勢いから祖母が逃げ切れたとは思っていない。何処かに亡骸があるはずだと思っていたが、探しても探しても見つからず、絶望にかすかな希望が湧いた。

「これだけ探して見つからないんだから、ひょっとして婆ちゃんは生きているのかもしれないね」

笑みを浮かべて弥助が云うと、父も微笑んだ。

「そうだな。そうであってくれればいいが……。おふくろはしづといからな。年寄りたちの殺し合いでも生き残ったように、今度も生きているかもしれないな。桃を売りに行った村や城下で達者にしているかも」

「一緒に暮らせればよかったんだけどね」

「それは……無理だっただろうな、倉持様が生きておられる限り。倉持様は伝説になぞられ、おふくろを山姥に仕立て上げようとなさった。火をつけなかったなら、おふくろはあの場で殺されていただろう」

弥助は頷いた。きらりと光った刀身が頭に浮かぶ。何もできなかった自分が蘇る。

「捜しに行こうか？」と、それが責務のような気がして弥助は云った。

「城下にか？」

「うん。一緒に暮らせないかもしれないけど、どこにいるかくらいは知っておきたいな」

「そうだな。仕事の合間を見て捜しに行くか」

ふたりは微笑み合った。たぶん見つけられるだろう、と弥助は思った。

しかし、城下に祖母を捜しても、その姿はなかった。祖母の桃を買ってくれた人は見つかった。話を聞くと、このところ見ていないということだった。

「お鹿さんにはおいしい桃を持ってきてもらったからな、訪ねてきたら報せるよ」

「ぜひお願いします」

その後も祖母の知り合いを城下や麓の村に何人か見つけることはできた。だが、同じだった。誰もこのところの祖母を見ていない。楽観していた弥助は落胆した。祖母はあの日から消えてしまった。あの日、死んでしまっていたのだろうか――。

「婆ちゃんはどこへ行ったんだろう？ やっぱり……」

「分からん。死んだのかもしれないし、そうじゃないかもしれない。骨もなかったからな、生きていたと思ったんだが……」

祖母の亡骸はなかった。その祖母は城下にも麓の村にも姿を現していない。忽然と消えてしまった。まるで物の怪のように――。

山姥――その言葉が弥助の脳裏に浮かんだ。

山姥でもいいから生きていてほしい、と弥助は思った。

桃の木々が燃えた日が祖母の一応の命日となった。

一年目は無惨なままだったが、二年、三年過ぎると下草が生え、黒ずんだ地面に少しずつ緑が戻ってきた。そして四年目のことだった。一家総出の訪問、長助は母に手を引かれていた。

小屋の跡に母が花を手向ける。長助は他の兄弟たちと辺りを走り回っていた。もうすっかり馴染んでいる。その長助が声を上げた。

「なにこれ？」

弥助は長助が目を落とした地面に近づいた。父も寄ってくる。見ると、下草とは明らかに異質の幼木が育っていた。すくと空に向かっていく。

「どこからか種が飛んできたんだろうな」と父が云う。

「きっと桃の木だよ」

確信はなかったが、そうとしか弥助には思えなかった。

祖母がここへ種を運んだに違いない。

あるいは、山姥の祖母が桃の木に姿を変えた——

馬鹿な考えだと弥助は思ったが、その考えを捨てきれなかった。祖母はこの場所で再生し、憎き倉持を出し抜こうとしているのではないだろうか。火を放って倉持にこの地を諦めさせ、ひっそりと再生する——

「この木はおふくろみたいだな」と、父がぼつりと云う。

「お義母さんみたい？」

母が不思議そうに父を見る。

「ああ。こんなところに根を張ってしぶとく生きているじゃないか。まるでおふくろだ」

「そうですね。今度は大切に育てなくちゃいけませんね」

父が弟たちを見渡す。

「この木のことは秘密だぞ」

険しい顔の父に皆が頷いた。父も同じ考えを持ってきていた——そのことが弥助は嬉しかった。そして弥助の脳裏にある光景が思い浮かんだ。初めてこの地に足を踏み入れたときの光景——無数の花びらが宙を舞っていた。そんな光景があと数年後には見られるだろう。一面の桃の木、舞う花びら、その下にいる自分——そのときまで、そして、それからもこの地を護っていかう、と弥助は胸中で誓った。

了